

魔羅達科学性器

「いやあお待ちせ、ハーンさん。ごめんよ、遅くなって」

「いえ、私も今来たところですから」

土曜の夜は日本語の個人レッスンというのが、来日してからのメリーの習慣だった。

先生は中年の男で、もともと海外に勤めていたらしい。身体を壊して以降は日本に戻り、こうして個人相手に様々な言語を教えているのだという。丸くころころした体型に、愛嬌ある笑顔、つるりと禿げあがった頭が、七福神の布袋様を想像させる。憎めない人だった。授業の場所は時によって違う。互いの家で行うこともあれば、今回のようにファミレスで食事をとりながら、ということもあった。いつもは時間通りに来る彼だが、手前の授業が長引いたとかで、珍しく遅れてきた。

「ええと、どうしようか、レッスン時間を後ろにずらすかい？」

「そうですね、この後予定もないので、それでお願います」

「よし、じゃあそうしよう。ゆっくりやろうか。メリーちゃんの場合は、授業というよりお話になるしね。立派な生徒だよ、君は」

これは、自分が改めて教えるようなことはない、という意味だった。本人の努力もあり、メリーの日本語は来日当時と比較しても相当に上達している。正直、彼の授業が役に立つ段階はとっくに過ぎているのだ。

だからといって、卒業という話にもならなかった。彼女からすれば、彼は来日初期段階から親交のある相手で、ありがたいことに向こうもこちらを気に入ってくれているらしく、だからこうして、二人は授業という名の友人づきあいを続けていた。

「あ、ごめんなさい、その前に少し、お手洗いに」

遅刻者を待っている間の手持ち無沙汰をコーヒーで埋めようとしたのがいけなかったのだろう。不意に訪れる尿意にメリーは立ち上がり、手洗へ向かう。

ファミレスだけあって、子連れの利用を想定しているのだろう、ベビーシートが備え付けられており、そこそこに広い。一人で使うには、かえって落ち着かない気もする……そんなことを思いつつ扉を閉めようとしたところ、不意に手が挟み込まれ、遮られる。

何事かと思っているうちに、彼がするりと、中に入ってきた。

「え、っと、先生？」

外には男女共用とこそ書かれていたものの、だからといって他人が入っているところに入ってきていいという話にはならない。警察を呼ばれてもおかしくない行動だった。

困惑するメリーと反対に、彼はにこにことした笑みを浮かべたまま、口を開く。

「それじゃあ、レッスンを始めようか、メリーちゃん？」

犯罪的行為と裏腹なのんびりした口調で述べたのは、使用中の個室に侵入したことへの

弁明でもなんでもなく、授業開始の宣言だった。それがかえって、異様さを演出する。

「ああ……はい、そういうことでしたか。わかりました、今日もよろしくお願いします」

それに対し彼女は、まともな説明を求めもしなければ、変質者だと悲鳴をあげもしない。授業を始めるという教師に対する、模範的な生徒の言葉を述べ、頭を下げてみせた。

「よろしい。さっきも言ったけど、君は本当に立派な生徒だからね、ゆっくり、じっくり楽しんでもらおうか、どれ」

彼はメリーの後ろに回りこむと、その掌でもって、彼女の尻に触る。手が当たった、というようなものではない。明らかに性的なニュアンスを含んだ手つきだ。

「とくにこのケツなんて、丸々として実に素晴らしい」

「んっ、先生」

発言も行為も、セクシャルハラスメントと呼ぶにも露骨すぎるほどだ。しかしメリーは拒まなかった。それどころか、彼を呼ぶ声は、続きを望んでいるかのようですらあった。

「先生、じゃあないだろう？」

「ごめんなさい、おじさま」

授業中は、おじさまという呼称を使うよう言われていた。彼は相変わらずの恵比須顔を浮かべている。声色もだいたい同じだが、何かねっとりとしたものが含まれていた。

「相変わらず、本当にいいケツだよ、歩いてるだけで男を誘ってるように思えるくらいのもんじゃないか、こんなの、なあ？」

たっぷりと肉をつけながらも垂れることなくきゅっと引き締まるヒップに、その輪郭をなぞるようにして掌で触れてくる。布越しにも丸さの分かる、たっぷりした尻を。メリーは抵抗もせず、ただ詰まったような吐息をこぼしながら、されるがままにしている。

「君がさっき手洗いに行こうとしてるときにさ、こっちに背中を向けたらう？ あれでさ、こっちに君のケツが見えたわけだよ。この、男十人中十人ともがヨダレ垂らして欲しがるような、こんなゆったりした服の上からも分かるデカケツがね。そしたら、僕らの席の横に座ってた眼鏡の学生、彼も君のケツをガン見しててね。いやあ、若いて素晴らしいというべきかな、欲望丸出しの視線だったよ。自覚してるか知らないが、罪づくりなことだ」「ごめんなさい、おじさま、メリーはいけない、いやらしい女です」

「知ってるさ。だからあのとき、それに気づかせてあげたんだ。君のような女を相手に、普通に日本語を教えるだけだなんて、お互いに不幸でしかないと思うからね」

彼が言っているのは、レッスンを始めて半年ほど経ったところに起きた出来事のことだ。その日は彼の家でのレッスンで、メリーは彼にレイプされた。レッスンを終えて帰ろうとした際、後ろから押し倒され、そのまま犯された。

改めていうまでもなく、犯罪だ。出るところに出れば彼の両手にお縄がかかるだろうし、人生が終わることだろう。けれども彼女は、そうしなかった。凌辱時に写真でも撮られ、それをネタにゆすられただとか、暴力を振るわれただとか、そういうことではない。

それが初体験というわけではなかった。母国にいたころ、彼氏に頼み込まれ、一度だけしたことがある。そのときは、夢我夢中だった相手がすぐに果ててしまったこともあり、まるで気持ちよくなれなかった。それで、セックスに対して抱いていた、甘美なものなのだろうという幻想を、失うこととなった。

ところが、彼との行為は、まさにその幻想を復活させるものだった。激しい喜びが全身を駆け巡り、体が内側から蕩かされるかのようにだった。その喜びの前に、メリーはあっという間に懐柔されたのだ。

レッスンがレッスンでなくなったのは、その日からだった。互いの家やホテルで、授業と称して抱いてもらっている。甘美な時間を過ごせるのだから、辞めるなどと考えるはずもなかった。

「さて、まずは宿題の確認からでしょうか。説明してごらん、その上手になった日本語で」

「さん……いや、五回です」

「五回。一日一回ペースか、君にしては控えめだね」

「は、はい、研究が忙しくてっ」

語尾が吊り上がった。彼に尻肉をつねられたのだ。五回という答えは、彼を満足させるものではなかった。

「嘘をつくのはよくない。本当のことを言いなさい」

こちらの瞳を覗き込みながら、そういわれた。隠し事は通じないぞと言わんばかりの目だった。見抜かれている。

「わ、わかりません……たくさん、したので」

宿題、というのは、もちろんそのままの意味ではない。オナニーの隠語だ。週に何度自慰したか——あからさまに性的な質問だ。人に訊くようなことではないし、訊かれたからといって答えるべきものではない。それでもメリーは、正直に答える。

ほほうと、彼はわざとらしい感心の声をあげる。

「わからないほどか、淫乱だな、たとえば、どういうふうに？」

「月曜日は、おじさまの言いつけ通り、大学で……、サークルの部室にしている空き教室があった、そこで。サークルのもう一人が来てなかったから、服を脱いで、裸になって……、鍵のかかる部屋なんですけど、かけませんでした。もし誰か来たらって、そういうスリルがあったほうが、その、気持ちいいので、それで、窓際でした」

話している間、彼はずっとこちらの尻を撫でまわしていた。膝の上ですやすや眠る猫を撫でまわすような、そんな気楽さだった。

言葉が口から滑り出るたびに、快感を覚える。絶対に他人には明かせないようなことを彼にだけはあえて明かす。その行為自体が、彼女にとってはずでに性行為の一種だった。

男は何も言わず、にやにやした笑みを浮かべている。続きを促すときのジェスチャーだ。「窓から見た真下に第二グラウンドがあるんですけど、ラグビー部の人たちが練習して、角度的に絶対見えないんですけど、もしかしたら見えてるかもしれないって、その人たちじゃなくても、どこかから見られてるかもしれないって、そういう風に考えたら、余計に気持ちよくて」

「ほかにほ？」

「水曜日に、レディステードから映画を見に行きました。人気の作品じゃなくて、すごいマイナーなやつです。平日の昼っていつても、隣のホールの恋愛映画はそこそこお客さんも入ってたのに、こっちはガラガラでした。私と、知らないおじさんと、あとおじいさんがいたくらいだと思います。内容は覚えてませんが、見てなかったの？」

「見てなかった？ その映画を見に行ったんだろう？」

「実は違うんです。そうじゃなくて、オナニーするために入ったんです。だからなるべく

人の入らなくてバレにくい、マイナーなやつを選びました。バレないように一番後ろの席に座って、なるべく声も殺して、でもそれ、前に座ってる人が何かの拍子に振り向いたら、一発でアウトじゃないですか？ でも、それがかえってよくて、一杯イきました」

「続けて」

「昨日は、おじさまにシてほしくて、我慢できなくて、疼いて疼いて仕方がなかったから、朝からずっとシてました。指とか、前にもらったおもちゃとかも使って、ぐちゃぐちゃにかき回して、気づいたら夕方になって、体中の水分が出ちゃって、シャツがぐしゃぐしゃになってました」

他人にするようなものではない、赤裸々極まる告白だった。けれども、話せば話すほど、言葉はすらすらと流れるように出始めた。尻を撫でられることによるじわじわとした快感が、彼女の頭に靄をかけていた。一種のトランス状態だ。今なら、どんな恥ずかしい質問にも答えることだろう。

「夢中になってオナニーするだなんて、サルみたいだねえ、とびきりいやらしいサルだ」

「ごめんなさい、おじさま」

「どこで、何回いったんだい？」

「何回……、ごめんなさい、わかりません。お豆と、おっぱいと、おまんこ……あとは、その、

お尻でッ」

「日本語も上手になったけど、まだ完璧じゃないようだねえ」

また、尻をつねられた。まだまともに授業をしていたころ、当時は日本に来てから日が浅かったこともあり、言葉遣いを正されることがままあった。これもそうだ。正しい語彙を選ばなくては。彼に教わった表現を。

「け、けつ、けつまんこでイきました。何回も、一回とか二回とかじゃなくて、とにかくたくさん、いっぱいです。数えられなくなるくらい」

けつまんこ。尻穴のことを、そう呼ぶよう言われていた。二語からなる複合語で、そのどちらもあまりにも品がない。そういう表現を女が使うことに、彼は何らかの性的嗜好を見出していた。

よろしい、と言わんばかりに、彼はうなづく。

「そうかい、メリーちゃんはケツ穴が大好きだね、教えてあげた甲斐があったよ」

彼に抱かれる中で、もつとも執拗に責められたのがそこだった。はじめは正気を疑った。そこを使った行為は、ポルノの中にだけ存在する幻想だと思っていたからだ。それが今や、彼女の中でも最も敏感な性器になっていた。所かまわず疼いてしまうような、淫らな穴に仕立て上げられていた。

「だから、こんなにいやらしいケツになるんだよな、丸々として、むっちり肉が詰まって、触ってくださいと言わんばかりに自己主張して。大体、こんなにゆったりしたワンピースなんて着ておいて、それでもシルエツトが浮かびあがってくるなんて、とんでもない」

「あ……ん、ごめんなさい、いやらしいケツで」

言いながら、彼は手を丸肉に這い回らせる。たっぷりとした肉の感触を楽しむように、時折揉みしだいてくる。甘い吐息とともに謝罪の言葉を述べた。だからどうか、この悪い女をいつものように躰けてほしいという思いとともに。

「あっ……」

後ろから、彼は腰を密着させてくる。両尻たぶの、ちょうど狭間のあたりに、硬いものが押し当てられるのを感じた。それが何であるか、彼女にはすぐわかる。今まで何度も、自分を躰けてきたものだからだ。

彼のもう片腕が、乳房に伸ばされる。下からすくい上げるような形で、鷲掴んでくる。

「ちゃんと言いつけ通りにしてきたようだね、えらいぞ」

「はい、ありがとうございます」

大学生の柔らかな乳肉の感触を楽しむように、むにゅり、むにゅりと揉みしだいてくる。若い肉は、彼の指を受け入れつつも豊かな弾力でもって押し返していた。

「もう乳首がこんなに尖っているじゃないか。服の上からでも見えていたからね。これで街を歩いてきたのかい？ 道行く人が振り返ったんじゃないかな」

「んっ……！」

指摘の通り、彼女の乳首は充血し、ぴんと勃ち上がり、ワンピース越しにシルエットを浮かび上がらせていた。ということは、ブラジャーを着けていないということだ。それが、彼の言いつけだった。

指先で摘み上げられ、今までのじわじわとした性感とは違う、ぴりりとした快感が走る。上がりかけた声を、慌てて抑えた。いくら鍵をかけているとはいえ、公共の場だ。

一方の彼は、そんなことなどお構いなしに、乳房と尻を弄んでくる。金庫のダイヤルを合わせるように乳首を転がしながら、尻たぶをやわやわと揉んでくる。メリーは甘い声をこぼしながら、さらなる行為を求めるように、自ら彼に発情した肉体を預けている。

メリーもただされるばかりではなかった。後ろ手に彼の腰に手を伸ばし、スラックスに触れる。チャックを下ろし、その内側へ指を潜り込ませる。

トランクス越しに、ソレの輪郭をなぞる。完全というわけではないが、勃起している。普段の柔らかさと臨戦態勢の硬さの合わさった、ぐにぐにとした弾力が指を通じて伝わる。さらに内側に、指を忍ばせる。まだ五月とはいえ、気温も上がってきている。日中一日

を過ごしたトランクスの内側は、じっとりと蒸れて熱をこもらせていた。

どうにかこうにか、彼自身を衣服の外側に露出させる。おそろおそろ、竿に指を絡める。やはり、熱い。蒸れていたこともあるだろうが、内側で滾る血液の流れが、うっとりするような熱を放っているのだ。

ゆっくりと、扱き始める。今まで教わってきたとおりに、ガラス細工を扱うように丁寧に、しかし大胆に。彼はわずかに腰をヒクつかせる。

「いいじゃないか、熱心な生徒に教えるのは楽しいことだ」

「アッ、んうッ……」

くりくりと乳首を転がしていた右手の動きが、やや強まる。乳輪の淵をなぞるように指を滑らしていたかと思えば、突然乳頭をきゅうと摘んでくる。たっぷりとした両尻たぶを片手で器用に割り開くと、その間の小さなすぼまりを、布越しに刺激してくる。

与えられる快感はメリーの脳みそを蕩かし、恍惚に放り込む。公共の場だということも忘れ、彼とのペッティングに没頭していく。

「は、あっ、ん」

手から伝わる熱が、じわじわと理性を削り取っていくように感じられた。ペニスというのは魔力を秘めており、その存在感だけで女を狂わせてしまう。けれどもメリーは、その

ことを危険だとかいうふうには捉えていなかった。むしろもっと狂わせてほしいと、そうして得られる快樂でもって自分を驕けてほしいとすら考えていた。

「ん、はあ、っ、あ——んッ」

はあ、はあと乾いた吐息を零していた口が塞がれる。彼が後ろから、口づけてきたのだ。すぐさま、舌が入り込んでくる。彼女は拒まなかった。それどころか自ら彼を受け入れ、舌と舌とを絡ませ始めた。

「ぢゆるッ、んぐぶ、ぐっ、ぢゆるる、ずぞ」

「んふ、んう、んっ、ぢゆるっ、んく、ん」

ねっとりとした唾液の音がする。ミントの香りがした。ガムでも噛んでいたのだろう。粘膜の音を立てながら、唾液が送り込まれる。嚥下しながら、こちらも送り返す。

性交と同様、キスも、彼が初めての相手ではない。例の昔の彼氏としたことがあった。けれども、やはり当時は、こんなものかという感想しか抱けなかった。激しく吸い付いてくるだけの行為に、いったい何を見出せというのか。向こうにしてみればすれば輝かしい青春の一ページだったのだろうが、こちらにとってみれば、がむしゃらな勢いにただただ付き合わされただけ、という感じだった。

それが、彼との接吻はどうだろう。酸いも甘いも噛み分け、女体を味わい尽くした男の

接吻だ。自分が気持ちよくなるだけでない、相手の官能を高めることまで考えたキスは、さながら口で行うセックスだった。

舌に舌がじゃれついてくる。お返しのように絡ませる。歯茎、口壁と、舌尖を這わせ、愛撫していく。その間も彼は、こちらの体への愛撫をやめはしなかった。衣服の壁を隔てながらにして、的確に快感を高めてくる。にち、にちと、粘つく音がする。手で愛している彼のモノの、鈴口から滲んだ先走り汁が、手淫によってかき混ぜられる音だ。

「んっ……は」

たっぷり一分ほど口を通じて愛し合ったろうか、ようやく唇が離れる。呼吸が荒い。時期が時期なら、湯気が立ち上りそうだ。酸素を取り込めなかったからではない。

彼は体を離れた。じわじわとした快感が失われる。それだけで、発情している肉体は、じんじんと疼いた。

「ゆっくりやろうとは言ったけど、少しゆっくりしすぎたね。もう一つの宿題を、見せてくれるかな？」

「わかり、ました——」

彼に向き直る。ワンピースの裾を摘み上げ、持ち上げる。若々しく張りのある白い肌が、あらわになっていく。健康的なふくらみはぎから、むっちりとした肉づきの、すべすべした

太腿。それでもなお、彼女の手は上昇をやめず、したがって肌の露出度増加も止まらない。そして、それはとうとう、彼女の最もデリケートな部位にまで至る。だが、そこに存在すべき布は、どこにもありはしなかった。

ブラと同様、パンティすらも、メリーは身に着けていなかった。着けないように、言いつけられていたからだ。秘められるべき裂け目は、守られるものなど何一つとしてなく、ただ剥き出しにされていた。

もう一つの宿題というのは、下着を身に着けないことではなかった。ついだというと、彼女は、厳密には、何一つ身に着けていないというわけではなかった。下腹から、一本の筋がすうと降りて、秘部の裂け目に沿うように股の間を通り、尻へと向かっている。彼女の肉体を戒め、じくじく刺すような快感を与え続けていたもの——荒縄。

文字通り自縄自縛し、一週間を過ごすこと。それがもう一つの宿題だった。

「どう……でしょうか」

「ふむ」

彼は腰をかがめ、鼻息のかかりそうなほど近くで、彼女の秘部をじっと見つめていた。縄による刺激と、彼から与えられる快感、そして何より、こんなところでレッスンをしているということへの興奮によって、すでにとるところに濡れそぼった秘貝を。

「ふうー……む」

彼は長々と、古美術の鑑定でもするかのように、じつくり、本当にじつくりと、彼女の淫裂を眺め続けていた。そこがどのようなありさまになっているかなど、一目見ただけでわかるはずだ。それでもこうまで時間をかけるのは、羞恥を覚えさせたいからだろう。

「うん、ちゃんと宿題をこなしたようだね、素晴らしい」

彼はそう言った。例えば言いつけを無視して、平日の間は普通に過ごしていたとして、彼がそれを知るよしはない。けれども、もしそうしていたら、見透かされていた。根拠はないが、そう感じられた。

「それにしても、どろどろじゃないか。匂いもすごい。そんなに興奮してたのかい？」

彼の指摘の通り、メリーの下半身は、彼女自身の蜜にまみれていた。秘貝から溢れ出るしずくが、ふさふさと生い茂る金色の茂みや、健康的に肉のついた太腿を濡らし、照明の光を浴びててらてらと輝いている。濃厚な女の匂いが立ち上っている。座席で彼を待っている間、オーダーを取りに来た店員にばれないかと、ひやひやさせられたものだ。

「アッ！」

彼は何気ないしぐさで、秘貝に指を這わせてくる。痛いほどに充血し尖った肉の豆に、指先でつんと触れる。それだけで、ぴりぴりするような刺激が走り、喉の奥から詰まった

ような声がこぼれた。

「感度も良好、まったく君はいい生徒だよ、メリーちゃん」

「ありがとうございます……ああ……」

くちっ、くちっ、水揚げされたばかりの貝の身を指で擦り上げられる。秘肉を、指先で弄ばれている。快感とともに、恍惚が身体を満たしていく。膝がかくかくと震え、腰が前後に揺れる。

「さあ、脱ぐんだ、そのイヤラシイ体を、すべて見せてごらん」

「はい、どうか、見てください、私のいやらしい体を」

命じられ、従う。口上はすらすらと滑り出た。彼に教わったものだ。

たくし上げたままだったワンピースの裾を、さらに持ち上げていく。ぬらぬらと濡れた秘部、生い茂る金色の庭園から、さらに上へ上へ、肌があらわになっていく。

臍が現れ、さらに腹が現れる。ほどよく脂を備えた腹は、見るからに柔らかでたっぷりとしたものだった。それでいて、肥えているというほどではない。ほどほどをわきまえた輪郭だ。もともと色素が薄い上、季節を問わず露出の少ない恰好を好むために、肌は本当に白い。季節外れの雪が降ったかのようなだった。六角形に這わされた縄がなければ、吸い込まれてしまいそうなほどだった。

さらに上まで脱ごうとするものの、すんなりとはいかない。すれ違う人が振り返るほど豊満な乳が、ひっかかっているのだ。ぐいぐいと乳肉が持ち上げられ、柔らかに形を変える。それでも布地は上へ上へ、じわじわと捲くられていく。果実のようにふくよかな乳房の先端の尖りを布が越えた途端、乳肉は戒めから解き放たれ、ぷるんっ！と震えてみせた。マジックショーのパンチラインのように、注目を集める光景だった。

「ほお……」

その様は、彼に感嘆のため息をこぼさせるに足るほどのものだった。乳房そのものもだ。彼女の乳肉は掌に余るほどもたわわで、縄によって戒められることで強調されている。ブラを着けていないにも関わらず、誰もが羨むほどに整った形を保っている。マシユマロのようだと一目見ただけで感じるほど柔らかく、一方でグミのように弾力がある。

先端のあたりは周囲に比べてやや色を濃くしている。乳輪は広めで、普段からうっすら盛り上がっている。パフィーニップルというやつだ。それゆえに乳首は埋もれがちであり、いわゆる陥没乳首なのだが、今は極まった性的興奮によって立ち上がり、己の存在を主張している。

のびやかに左右へ分かれた鎖骨から、さらに上に向かえば、終点、彼女の顔へ行きつく。頬は紅潮し、彼から視線をそらすように、斜め下を見ている。己の体をこのような、個室

とはいえ公共の場でさらしていることに、強い羞恥、そしてなにより興奮を覚えていた。

「相変わらず、素晴らしい体だ。しかも、会うたびにいやらしい肉付きになっていくね。胸も、前より大きくなっただんじゃないかい？」

ねっとりした視線が浴びせられる。質量をもつかのような視線が、きつく縄の食い込む白い柔肌を這いまわる。舌で舐めまわされているかのよう、あるいは蛇に這われているかのようにすら感じられた。

「ああ——」

恥ずかしい、どうかこれ以上見ないでほしいという強い羞恥に襲われる一方で、もっと見てほしいと思う自分がある。相反した矛盾する感情だが、それぞれがそれぞれを高めてもいた。

「おいおい、見られただけでおツユがあふれてきてるじゃないか、なんていやらしいんだ、君って子は？」

「ああん……!!」

くちゃっ、と、生肉を口を開けて噛むような音がした。彼が再び、秘貝に触れたのだ。彼の指摘通り、なにもされていないというのに、そこからは女汁が溢れ出し、雫となってしたたっていた。

「こっちも、尻肉に縄が食い込んで、ムチムチして、なんてエロいケツなんだい？ そら、君の好きな穴も触ってあげよう」

「あ、は、どうぞ、触ってください、おじさま」

縄によって分断され、その形を強調されていた尻肉が、彼の手によって割り開かれる。谷間の奥に秘められていた不浄の穴は、前から滴った蜜によって濡れそぼち、ひくひくと収縮しては、刺激を待ちわびているようだった。

彼はそこに指を這わせ、くに、ぐに、と浅く穿ってくる。秘部で得られるのとは異なる、背骨が蕩けるような感覚に、思わず腰を押し付けてしまう。

そうして己の下半分を視線で犯され、指で弄繰り回されているうちに、ある感覚が不意に訪れる。というより、思い出したといったほうが近い。

「アッ、は、ツクう、ん——……あっ、す、みません、その、ちょっと」

「なんだい？」

「あの……催したので、その」

彼の乱入によってすっかり忘れていたが、そもそも、それで手洗にきたのだった。彼は軽く眉を上げ、便器を指さした。

「すればいいじゃないか」

「えっ……」

「言い方を変えようか？　ここでしなさい。その姿を私に見せるんだ、いいね？」

返答に窮した。彼に抱かれる中で、さんざん恥をさらしてきたが、目の前で排泄するというのは、性的なあれこれとは方向が異なるように思われた。羞恥の向きが異なる。

けれども、せねばならない。彼の声色は、相変わらず柔らかなものではあったが、有無を言わさぬものがあつた。そしてそれが、彼女に直感させていた。経験則だが、こういう口調のときの彼に従えば、得も言われぬ恍惚に包まれることができる。

だから彼女は、首を縦に振る。便座に座り、彼によく見えるよう、両足を広げた。

「そうじゃないな、君にふさわしい恰好はそうじゃない」

しかし、彼には気に入らなかつたらしい。ふさわしい恰好をとらせてやろうとばかりに、こちらの足を掴んでくる。されるがままに従うと、ちょうど便座の上で、M字に開脚しているような形になった。

丸見えて、いかにも品がない。これがお前にふさわしい恰好だといわれ、彼女が覚えたのは、興奮だった。

目で促される。まったく嫌でないかといえば嘘だ。死にたいほど恥ずかしい。それでも、拒まない。従えばきつと、他のどんな手段でも得られない快感を得ることができるのだ。

「あ、あ、どうか見てください、私の、恥ずかしいところ——あ、あつ、ああ、あああ」
陰唇を指で広げるようにし、堪えていたものを解き放つ。膀胱に溜まっていた黄金水が、ぶしゃあ、と音を立てながら、放物線を描いて飛ぶ。

恰好の異常さともかくとして、していること自体はただの排泄行為に過ぎない。だがその快感は、ただの排泄行為から得られる以上のものになっていた。見られているというだけでこうも違うのかと、メリーは驚きとともに、法悦に浸る。

「すごい勢いだ。匂いもツンとして雌臭い。そんなに溜めていたのかい？」

「あぁっ、ごめんなさい、止まらないのおっ」

「もちろん構わないとも。すべて出してしまいなさい、さぁ」

膀胱を刺激するように、下腹を撫でてくる。ただでさえ止まらないものが、輪をかけてとめどなくなっていく。しゃあ、しゃああと、水音が響く。

「アッ、アッ、あああ——……ッ」

体の中から水分が放出される感覚が、たまらなかった。びく、びくと、身体が痙攣しているのを感じた。絶頂していた。肉体的な絶頂ではない。精神的な絶頂だ。

がたりと、硬い音がした。タンクに体を預けた。放心した彼女は、ぐったりと脱力している。ともすれば、便座から滑り落ちてしまいそうだった。

「こらこら、レッスン中に上の空になっちゃいけないだろう？」

「んひッ！」

強烈な刺激に、意識を取り戻す。痛いほど尖っていた肉豆を、指先でぴんと弾かれた。肺の奥から空気が吐き出され、両足が震えた。

「さて、汚れてしまったようだね、きれいにしてあげようじゃないか」

「え——あふぁッ！ ……んッ、んくうッ……!!」

飛び出した嬌声に、慌てて口を押える。外に漏れたら大ごとだ。くぐもった声が、指の隙間から零れ落ちる。彼はメリーの両脚の間に顔をうずめ、秘貝に——ちょうど今しがた排泄を終えたばかりの部位に、舌を這わせていた。

「ふ、くう、ンンウ、ツく、——！」

くちや、ぬちゃっと、犬がミルクを舐めるのを幾分粘っこくしたかのような、耳につく音が響く。わざとそうしているのだろう。自らの肉体がたてる卑猥な音を、聞かせようとしているのだ。

「ッん、く、んんう、ッふ！」

甘い声が、鼻の奥から零れる。ぬちゅぬちゅという音のたび、身体が小さく跳ね、乳房も震える。

肉豆や陰唇を、舌先が転がしてくる。ときおり、身体を戒める縄を軽く引っ張り、肉貝に食い込ませてくる。ぴちゃ、ぴちゃと、雫の滴る音がする。溢れかえる愛蜜が、便器の水たまりに落ちていく。

「ッ、！　ン、ふう、ふう、んんう——ッ」

身体の間隔が、次第に短くなっていく。彼の舌技は巧みで、ただでさえ高まっていた肉体は、あっという間に追い詰められていた。もう少しでイける。そう考えた矢先、彼は舌を引っ込める。

「こんなところに長居するのはよくないね。他のお客さんだって、用を足したくなることはあるかもしれないし。早いところ退散しようか」

しれっと、そんなことを述べた。こちらの視線の意図を汲んだか、彼は肩をすくめる。「そんなさみしそうな顔をしないでくれよ？　お楽しみはこれからさ、たっぷり、一晩かけて、いろいろ教えてあげよう」

「いろいろ——」

いろいろ。その中には、今のよりも気持ちの良いことも——たとえば、互いの下半身を繋ぎ合わせるようなことも、含まれているのだろう。お預けを食らった恨みも忘れ、彼女は胸を高鳴らせる。

「そうとも。だけどまあ、まずはここを出ようか。服を着てくれるかな……いや、その服じゃない」

言われ、ベビーベッドに掛けていたワンピースを取ろうとする。けれども彼は、それを遮った。そして、わきに置いていた紙袋を手取る。

「優秀な生徒に、僕からプレゼントだ。さあ、これを着てくれるかな？」

「えっと、あの、これ、ほんとに？」
「着てくれるかな？」

「わ、わかりました……」

彼が手渡してきたのは、チューブ型のボディコンドレスだった。いつものワンピースに合わせたのか紫色だが、色合いはより派手派手しく、ナイロン製なため光を反射し目立つ。また背中と脇腹・腰に太腿のあたりが大きく開かれているし、スカート部はマイクロミニになっていて、あまりに露出が多い。公共の場で着るものではない。夜の店だとか、そういうところで使うような衣装だった。セットの靴として渡されたのはエナメル加工のピンヒールで、これまた外行きで使うものには思えない。

こんなものを着て、外を歩けというのか。それでも彼女はよい生徒であり、彼の指示に背きはしなかった。言われた通り、それに体を通していく。

「んん、キツっ……」

サイズを間違っているのではないかと思ったが、彼のことだから、わざとなのだろう。衣装はボディコンであることを差し引いても相当にぴっちりとしており、身体に密着しているといってもいいほどだった。当然、たわわな胸の輪郭も、ぷっくりと膨らむ乳輪も、その姿をはっきりと浮かび上がらせている。

背中が大きく開いたデザインだが、実際に着てみると、開いているどころではなかった。すべてさらけ出されているといってもよく、尻の谷間の上端がうかがえそうなほどだった。スカート部はマイクロミニと呼ぶにも短すぎるほどのもので、少しでも動けば秘部や尻肉が見えてしまいそうだ。実際、歩いたら見えてしまうだろう。下着の一つも身に着けず、それどころか縄に戒められはしたなく濡れている下半身が。タイトなデザインのせいで、ヒップラインは谷間が浮かびそうなほど浮かび上がっている。

改めて、己の体をまじまじと眺める。そして気づいた。よくよく見てみれば、この衣装透けている。体の輪郭が浮かび上がるようにつくりだからそう思えるだけかと思ったが、そんなことはなかった。布地がかなり薄手で、近くで見ると肌が透けて見えるのだ。

「あの、これ……」

さすがにこれは、家やホテルでならないが、外では着られない。しかし、彼はにこにこ

とした笑顔を浮かべていた。こういう顔のときの彼は、己の考えを曲げない。

「いいねえ、よく似合ってるよ、いやらしい君の本性にぴったりだよ」

「で、でもさすがにこれは、その、いくらなんでも、その」

「ん？ 嫌なのかい？ どうして？」

両脚の間に彼の手が滑り込み、剥き出しの秘肉をいじくってくる。短すぎるスカートは、なんの妨げにもなりはしなかった。

「は、あ、んッ、はアッ——」

「この恰好で外を歩けば、みんなが君に注目するよ、見られて気持ちよかったんだろう、じゃあもつと、見てもらおうじゃないか？」

「あぁっ、は、んッ、く、んうう」

ちゅくっ、ちゅくっ、中指を第一関節ほどまで挿し込み、秘裂浅くをえぐりながら、耳元で囁いてくる。彼によって躡けられている脳みそは快楽に極端に弱く、尊厳や社会的地位を喪失しかねないという懸念など、あつという間に忘れてしまう。リスクをまったく計算しなければ——というより、できなくなれば、それは素晴らしいアイデアに思えた。

彼一人に見られただけでも、イッてしまえそうなほどだった。では、不特定多数に恥をさらせば、どれほど気持ちいいだろう？

「わかりました、これ、着ます。着て、外を歩きます」

官能に蕩かされた頭でそう答えると、彼は満足げにうなずき、秘部から指を引き抜いた。半端なところで中断された膣孔が、きゅうきゅうと疼いている。

「いい考えだよ、メリーちゃん。でもまだ少し、プレゼントがあるんだ。そら、その壁に手をつけて、そのむっちりしたいやらしいケツをこっちに突き出してくれるかな？」

「こうですか？」

「脚をもう少し開いて」

指示に従う。マイクロミニのスカートが大きくまくれ、下半身が思い切りあらわになる。ピンヒールのおかげで、ヒップラインがより美しく性的なものになっている。

腰が淫らに、誘うようにくねっている。意識してのことではない。彼が何をしてくれるのかという期待が、彼女にそのような行動をとらせていた。

「素晴らしい眺めだね、そうそう、こういう景色が見たくて、その服を選んだんだ」

「んっ」

大きく開かれた背中を、ナメクジが這ったように感じた。比喻でなく、舐められたのだ。考えてみれば、この衣装のデザイン上、背中に這う縄が隠れず、はっきりと見えてしまう。今どのような行為をしているか、周りから見えて一目瞭然だ。彼はその縄に沿うように、

下へ下へと舌を這わせていく。

スカート部に至って、つまり背中中の露出部を舌で縦断して、ようやく彼は離れていった。だが、それで終わりではない。そのまま彼は、剥き出しになった白く丸い尻肉の狭間に手を伸ばし、禁忌たる薄茶色の菊穴を指先で解すように刺激する。

「あ、はあ、んっ、んう、もっど、ケツ穴あ」

気持ちが良い。が、散々に——縄責めもカウントすれば丸一週間も焦らされている肉体は、こんなものでは満足できない。甘えるように、鼻がかった声をこぼす。

「おやおやそんなにケツくねらせて、どれどれ」

「ああんっ」

本来なら出ていくことしかない穴に、逆に指が入り込んでくる。焦らしに焦らされ飢え切っている穴は、ようやく入ってきたものを逃がすまいとするかのように、ふんわりした腸壁でもってきゅうきゅうと締め付けていた。

「すごい締め付けだ。メリーちゃんのケツは完全におまんこだね、これは」

「はい、おじさまにおまんこにしてもらったんです、お願い、けつまんこしてください」

「人にお願いができるのは立派なことだ。えらいね。でもまだだね、お楽しみは最後までとっておかなくちゃあ」

「ひっ、い、ンッう」

わがままをとがめるように、指が腸内を出入りする。ぬぶつ、くぶつと、粘膜の擦れる、汁気の少ない音がする。蕩けるような快感が背骨を通じてじわじわ上ってくる、尻穴性交特有の感覚に、メリーは体を震わせる。だが、こんなものでは、ぜんぜん足りはしない。

「体が震えるたびに、ケツ肉も震わせて、いやはや、こんなのアダルトビデオでも見れやしない。本当にいやらしいことだね、はしたないこと極まらないよ」

彼の言う通り、メリーのたっぷりとした丸い尻肉は、彼女が身体を跳ねさせるたびに、ふるふると震えて見る者を楽しませていた。

男はメリーの貪欲な菊門から指を引き抜くと、はしたなく震えていた両尻たぶを驚掴みにし、マッサージでもするように、大きな円を描くような形で揉みしだいていく。彼女も、その動きに合わせてるように、腰をくねらせていた。

「まあ、僕も意地悪がしたいわけじゃあないからね、メリーちゃんがそこまで言うんなら、代わりのものをあげようじゃないか」

「代わりのもの……?」

そうはいつでも、指ではだめだ。この疼きは、粘膜と粘膜を触れ合わせることでしか、鎮められそうもなかった。

彼は例の紙袋から、ごそごそと何かを取り出した。数珠か何かのように見える。

「こんなにヒクつくいやらしいアナルを剥き出しにして歩き回るのは、大問題だからね。塞いでおいてあげようじゃないか」

それは、金属製のアナルビーズだった。ピンク色で、ビー玉よりやや大きな珠がいくつも連なっている。彼はそれに手早くローションをまぶすと、先端を剥き出しの菊門に押し当てる。

「んうッ……そんなの……」

そんなの入りません——という抗議は、正当性の一切ないものだ。これよりも太いモノを、彼女の菊穴は何度も咥えこんできた。今や立派な性器となった尻穴は、これくらいの異物ならすんなりと受け入れることだろう。

ひんやりとした感覚が、これから体内に異物が入ってくるのだという事実を彼女に強く意識させる。菊座はそれを拒むようにきゅうと収縮したが、パールには潤滑油がたっぷり塗りたくられているし、どのみちこれほど濡れそぼっているのは、抵抗などあってないようなものだった。